

氏名（本籍）	キン ジョウ マサ ノリ 金城正紀（沖縄県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第226号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉竹富島における祭祀の機能からみた集落と拝所の空間構成に関する研究

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	片山和俊
（論文第1副査）	〃	准教授（〃）	光井渉
（副査）	〃	教授（〃）	益子義弘
（〃）	〃	〃（〃）	六角鬼丈
（〃）	〃	〃（〃）	黒川哲郎
（〃）	九州大学	〃（都市・建築学部）	菊地成朋
（〃）	琉球大学	〃（工学部）	小倉暢之

（論文内容の要旨）

沖縄県八重山郡竹富町竹富島は、八重山諸島のほぼ中央に位置し、やや縦長の平らで小さな孤島である。居住域は島の中央に位置し、赤瓦の伝統的な家並みが広がる。

竹富島には御嶽（オン）と呼ばれる拝所が多く点在し、自然や生業に関連した神々が奉られる。また、幸福や豊穡をもたらすニーラン神が海の彼方から来訪し、祭祀集団が島の沿岸で歓待する。このような御嶽やニーランでの祭祀を通し、島の共同体は強い結束力を保ってきた。一方、竹富島は歴史的にみて八重山政治の中核であったため、祭祀は政治的な支配と統制を受け、その後も近代的な組織により制約を受け現在に至る。

本研究は、このような竹富島特有の社会情勢を背景に行われる祭祀の機能を通して、集落と拝所の空間構成を明らかにする。

第一章を「序論」とし、研究対象の特徴と視点、更に研究の目的と方法を述べる。御嶽は、主に「村御嶽（ムラオン）」「元の御嶽（ムトゥヌヤマ）」「子御嶽（ファーオン）」に類型される。なかでも元の御嶽は段階的な空間構成を持っており、古い共同体を表徴する「氏子（オンビ）」が所属する。氏子から「神司（カンツカサ）」が選ばれ、自然や生業に関する神を奉った御嶽の祈願を先導し、共同体による祭祀空間に宗教性を色濃く残す。一方で竹富島は、国家的な支配や自治組織による近代的規範を受け、組織による政治性に影響されてきた。

このような社会情勢を背景に、竹富島の祭祀空間は独特な構成を持つと考えられる。そこで本研究は、竹富島における年間祭祀のうち、従来の共同体を表徴する氏子と支配組織から変化した公民館組織が祈願や儀礼で対面し、御嶽の「ウブ（神域）」まで入る比較的古い祭祀として「穂利祭（プイ）」を、氏子が現れず神司と公民館組織が祈願や儀礼で同伴しウブに入らない比較的新しい祭祀として「結願祭（キツガン）」を研究対象とし、2つの祭祀の機能を通して集落と拝所の空間構成を分析する。

研究の方法は、祭祀のルートと「ユー（幸福・豊穡）」を分かち合う「ガーリ（競演）」の位置と機能から集落の空間構成を明らかにし、御嶽における着座構成、供物位置、香炉の焼香順から祭祀と香炉の機能を捉え、祈願とユー受容の過程から拝所の空間構成を明らかにした。

第二章を「穂利祭の祭祀空間」とし、穂利祭における集落と拝所の祭祀空間を探る。穂利祭は、3日間行われていたものが近年になって2日に再編された。1日目において、公民館組織が元の御嶽を参詣し儀礼を行う構造は、琉球王府の統治時に役人を接待した際の名残で、元の御嶽は共同体による祭祀の機能と、組織を迎接する機能の二面性を持つことを明らかにした。また、御嶽から戻ってくる際にみられる村辻でのガーリは再編後に組み込まれたもので、御嶽と居住域の間に空間的連続性を作り出していることを明らかにした。

第三章を「結願祭の祭祀空間」とし、結願祭における集落と拝所の祭祀空間を探る。結願祭では、神司と公民館役員が沿岸域に点在する3箇所の子御嶽とニーランへの祈願を所属とは関係なく分担する。この祈願分担の方法は、神司不足の時期に再編されたことを明らかにした。また、子御嶽とニーランは独自の機能を持つが、結願祭では四隅の守り神として機能していることを明らかにした。加えて御嶽では、ウブと拝殿の間に置かれた香炉がウブを遙拝する機能を持ち、御嶽に所属しない神司でも拝殿からの遙拝によって祈願とユー受容を可能としていることを明らかにした。

第四章を「祭祀の機能からみた集落と拝所の空間構成」とし、穂利祭と結願祭にみる祭祀の機能を比較し、集落と拝所の空間構成を分析している。

集落空間においては、沿岸域の四箇所の拝所を四隅の結界として、御嶽と居住域との関係を内一外の関係として読み替えている。このような祭祀空間の読み替えは、もともとの居住域における四隅の結界や村辻でのガーリの機能を別の場所に置き換えられることで可能となっている。そのことで、再編によって分節した祭祀空間を再構築していることを明らかにした。

また元の御嶽では、政治的統制や簡略化に対応するため、御嶽の機能に二面性を持たせ、段階的な空間構成を設けることで、共同体が持つ祭祀空間の原型であるウブの神聖さを守ってきたことを明らかにした。

第五章を「結論」とし、竹富島の祭祀や御嶽が、政治的統制や簡略化などの近代的な規範により制約を受けながら、一方で共同体の拠り所である祭祀空間を島特有な集落と拝所の空間構成を通し読み替え、守り続けてきたことを述べている。

本研究は、竹富島の祭祀にみる宗教性と政治性を背景に複合的な祭祀の機能を捉えることができ、それを通して集落と拝所の隠れた空間構成を明らかにすることができた。